社　是
誠実な施工
技能の開発向上
安全作業の確立
原価の低減
協同による社業の繁栄

九火新聞

昭和45年7月第59号
九州火力工事株式会社
福岡市薬院1丁目13番8号九電不動産ビル
電話代表（77）8881
印刷　有限会社 今井印刷所

社長事業拡大に積極策示す

新時代に対処する営業活動を

菅原社長

〔本店＝6月23日〕菅原社長は、九州電力が今後の火力発電所建設工事の発注方法を「メーカー据付け渡しにする」と発表した機会にこれまでの経営方針をつらぬくため決意を新たにするとともに、先年来進めてきた営業活動の強化を主軸にして、事業範囲拡大、経営基盤強化をさらに具体的に推進する方針を明らかにした。

社長が今回示した具体的内容は、①営業活動を強化するため、池田副社長を営業本部長とし、営業活動の推進体とする。②7月1日付で払込み資本金を現在の倍額6,000万円に増資を実現する。③九州電力以外の工事分野として火力発電のみならず各種プラント建設工事にも積極的に進出する。④当社の優秀な技術の保有力を内外にPRする……である。

九州電力からの受注は苅田4期を最後に、これまで特命の形で工事を一括受注してきた建設工事も、ことし着工する新相浦、唐津3期からメーカーの責任で据付け工事を行なうよう変更される。当然、当社が建設工事を受注できても、従来のように特命、一括受注の期待はうすく、他業者との競争見積になり、受注金額施工期間はきびしくなること必至である。

このため、当社はすでに株主総会で決定した増資で、払込み資本金を従来の倍額、6,000万円とし、将来発展のための設備資金確保につとめるとともに、企業体質も自立体制に少しづつ向ける。営業本部については、営業活動の母体を総務部、技術部の両方とし現業機関を含めた全社的総合力で行なうねらい。

また、このところ年に約2億円の売上げ増となっているが、九州各地で発展する工業地帯の一般産業へも積極的に進出、受注活動に努めて売上げ高を伸ばし、九電工事以外の受注シェアの拡大をはかる。

これを実現するため、協力業者の積極的育成を再検討し、将来直傭施工の場合と同様、技術的、工期的にレベルアップをはかりたい。また、九電の合理化と九火の合理化とは不可分であり、両者協力のもとにその成果をあげたい。建設部門のみならず、メンテナンス部門の工事施工方法でも、従来のやり方でよいなどというなまやさしい考えを改め、九火が今後さらにきびしい立場に置かれるということを再認識して、積極的に合理化を考えなければならない。

社長は、今後の営業活動は、"薄利多売"に徹し、事業規模を拡大したい。また心配される安全管理についても、役職者のみならず、従業員一人一人に万全を期するよう、とくに要望している。

大分2号　営業運転開始

〔大分〕当社が44年3月11日から主要機器据付工事を行なっていた九電大分発電所2号（出力25万KW）は、すでに昨年7月31日に完成した同1号機（出力25万KW）に引続き、6月1日から営業運転にはいった。

当社は44年3月11日のヘッダーの吊上げ工事から本格的に2号機の主要機器据付け工事に着手し、45年1月7日に火入れ3月1日に通汽と予定工期を2カ月間短縮して、4月上旬から試運転を進めていた。

同2号の通産省官庁検査は、5月28日から始まり、順調に検査が進み、さる6月1日午後4時、全負荷の出力25万KWで営業運転に入った。

この官庁検査にそなえ、当社では、最終点検を5月19日から、①ボイラバーナーの点検、②外側ケーシングの改造、③燃料系統の点検、④文字記入などの塗装仕上げを行ない、27日は発電所の化粧なおしをすませていた。

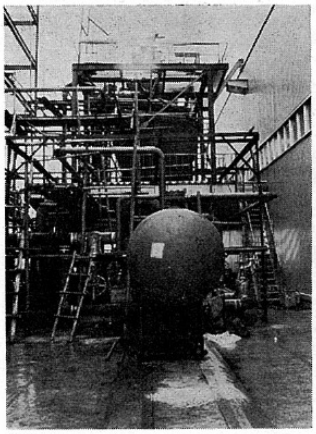
28日から行なわれた官庁検査は、①発電機、変圧機、高圧補機電動機の耐圧試験および密封油装置の保安試験、②電気系統のインターロック試験、③補機関係の最終運転確認試験、④ボイラの安全弁テスト、⑤運転上の保安テストの順で進められ、官庁検査3日目の5月30日には、4分の1と4分の2のタービンガバナーの負荷試験31日には4分の3と全負荷試験が行なわれ、5日には発電設備の全負荷試験を終えた。

同2号の営業運転開始で、同発電所の建設工事を担当した大分事務所は、1、2号の保修工事に従事することになったわけだが、新産都市大分の工業化促進にも積極的に取りくんでいる。

なお、同発電所建設工事では、第1期、第2期工事と連続して当社が主要機器据付け工事を担当し、昭和43年5月の1号ヘッダー揚げから2年1カ月間で、この2号営業運転開始となった。

三井アルミ自家発　156,000KW

担当の汽機部門も順調



〔写真〕当社が設定を行なった三井アルミ自家発（出力156,000KW）工事、上に見えるのが脱気器、手前に見えるのは高圧ヒーター

〔港＝6月15日〕大牟田市の九電港発電所に隣接する三池港埋立地にアルミ地金製錬工場を建設中の三井アルミニウム工業は、同工場へ電力を供給するために、自家用発電設備（出力＝15万6,000KW）を併行して建設している。

当社は、この発電設備の建設工事のうち、すでにテンプレートビーム設定用脚とタービン台埋設金物設定ウインチの据付け溶接電源の仮配線などの先行工事を行なっていたが主要機器設備のうちタービン部門の据付けについても本格的建設段階に入っている。

現在、今村所長以下20名と、協力業者の応援を得て工事を進めているが、すでに復水器据付け、高圧給水管配管、タービン発電機ソールプレートの設定、循環ポンプ据付け復水管冷却水管配管などが着々と進められ、6月10日からは発電機の据付け工事に入っている。

今後の建設工程は、8月1日にタービンの第2次水圧、9月19日にタービン中間検査、10月1日にボイラ火入れ、12月1日に通汽、46年3月1日には運転開始の予定。

なお、この建設工事について今村所長は「自家用発電所であるため、本館の建屋や敷地がせまく、配管工事や資材の搬入に、いままでとちがったくふうが必要だ」と語っている。

東京出張所店びらき

〝メーカーなど接触強まる〟

〔本店〕当社は6月16日から、新しく東京都千代田区有楽町1の3の日本電気協会ビルに、東京出張所を店びらきした。

この出張所の設置で、当社の業務機関は、本店、事務所5、支所1、出張所2、作業所2となった。

最近の当社の工事量は増大する傾向にあり、同時に中央の官庁、大手メーカーとの接渉が多くなったため東京に出張所を置き、これらの連絡接渉を円滑にできるようにした。

初代の出張所長には、九州電力東京支社で15年間勤務されていた鹿子木（かのこぎ）氏が発令された。

けんせつ

企業と資金

▷企業と資金との関係は、人体と血液とのつながりに似たところが多いと思う。人体が強健で精一杯活躍していくには、身体各部各器管が強じんな体質に日ごろから充分鍛錬されていること、さらに、純良で栄養豊富な血液が潤沢に全身を循環し、エネルギーを補給し続けなければならない。ひとたび、何かの事故とか病変が起きて、血液の質と量と流れに変調が起ることがあれば、ただちに全身に波及し、活動力は急減して大事にいたることさえある。

▷企業がめざましい生産活動を続け成長して行くには、優秀な人材が存分に活躍することが最大の要件である。こうした人材の企業活動の底流には、健全で安定した資金が間断なく正常な状態で補給され、これによって人材と資材が適時適量に投入されていかねばならない。

この事業資金の補給力は、企業を構成する人材、資産の状況、営業状態、また、これらの管理統制のよし悪しによってもたらされる「対外信用」によることはいうまでもない。

いうなれば、企業を構成する一人一人の毎日の仕事ぶりが会社の外部に対する信用に大きく影響し、あとの資金調達にプラスとなりあるいはマイナスとなるといっても過言でないと思う。しかし、これも人体の血液と同様、外見上は見落しがちなものである。

▷健康であるときは、ややもすれば病気を忘れ、暴飲暴食、不摂生に流れやすく、病を得てはじめて後悔反省することが多い。経営が順調な時は資金はいつでもどうにでもなるような錯覚を持ち勝ちで、これを放慢に使ったり、経営や仕事にけ怠が起ったりする。今日のように激動して行く社会の中で、ひとたび企業の体調に大異変でも起ろうものなら、少々の奮起ではとうてい取り返しがつかぬ。経営が順調なときこそ企業体質を強化し、対外信用を増し、資金調達力を伸ばして、非常時に備える心掛けが大切である。

▷当社では、数年後にはメーカー据付渡しの工事契約に切替えられる見通しのようであるから、大半が受取手形の形で資金調達されるようになる。資金繰りの問題は、しだいに切実なものになると思われる。

▷始めから順調なものはありえない。とくに、事業の創立には幾多の難問が集積し、なかでも資金繰りで関係者は、血みどろな辛苦をなめることが多い。当社も資本金500万円の払込み現金を事業資金としてスタートしたのであるが、本業の仕事はほとんどないのに、事業着手準備のため、多額の資金がまるで羽根が生えたように飛んでいく。ついには、資本金全額を喰いつぶし、その4～5倍もの借入金を使っても仕事が順調に進行しない時代があった。今日の火力ブーム時代など想像もしなかった時代で、銀行にお百度を踏んだり、資金繰り表を作文したり、資金担当者達は泣かされたものである。

夜中の午前2時ごろ石橋前相談役（当時常務取締役で事実上当社の経営責任者であった）から突然電話があって、「明日の借入は大丈夫だろうか、どうも心配で寝つかれない」と問い合せがあったりした。思いは同じで、たがいに長嘆息したもので今では懐かしい思い出となった。

こうした行き詰った資金窮乏の中で、銀行筋に顔がきいておられた土屋社長が親身に世話をされ、親会社の社長はじめ上層部がご支援していただいたおかげで、最大難関を突破することができ、今日の安泰が築かれてきた。

▷"備えあれば憂いなし"。今日の繁栄の時こそ、この機会を最大限に活用し、事業資金の増強積上げに精進して、将来の幸せの基盤を築いておきたいものである。

（相談役　古賀三郎）